

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13013

研究課題名（和文）日韓における離婚家庭の子どもの社会・文化的貧困を断ち切る支援モデルの開発

研究課題名（英文）The Development of Support Model for Breaking up Social and Cultural Poverty of Children Who Have Experienced Parental Divorce in Japan and Korea

研究代表者

姜 民護（KANG, MINH0）

同志社大学・社会学部・助教

研究者番号：60802254

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日韓における離婚家庭の子ども（育った成人を含む）220名、ひとり親家庭で育った成人82名、二人親家庭で育った成人252名から「子ども期の経済的ストレス」「社会的効力感」「家族健康性」「親子コミュニケーション」に関するデータを得ることができた。

離婚家庭の子ども（育った成人を含む）は、ひとり親家庭及び二人親家庭で育った成人に比べて「子ども期の経済的ストレス」が高く、また「親子コミュニケーション」「社会的効力感」「家族健康性」は低い結果であった。子ども期の経済的ストレスの高さが「親子コミュニケーション」「社会的効力感」「家族健康性」の低さに影響している可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最も学術的な意義としては「子ども期の経済的ストレス測定尺度」の開発があげられる。この尺度は「社会的体験及び文化的体験の機会の剥奪」から「経済的ストレス」を測定しようとしている。この尺度の開発によって従来の知見である「社会的・文化的貧困と経済的貧困との関係性」が支持されたことに加え、経済的ストレスは「社会的体験・文化的体験の機会の剥奪」という経済的貧困の外在化によって表出されることが明らかになった。

本研究の成果は、経済的な貧困状態にある子どもにとって重要なのは社会的体験や文化的体験ができる機会を保障することであることを示唆するものであり、それが本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we obtained data on "childhood economic stress," "social efficacy," "family health," and "parent-child communication" from 220 children (including adults raised in divorced families), 82 adults raised in single-parent families, and 252 adults raised in two-parent families in Japan and Korea.

Children of divorced families (including adults who grew up in divorced families) showed higher "childhood economic stress" and lower "parent-child communication," "social efficacy," and "family healthiness" than adults who grew up in single-parent families and two-parent families. The results suggest that high childhood economic stress may have an impact on low parent-child communication, social efficacy, and family health.

研究分野：社会福祉学

キーワード：日韓 社会的貧困 文化的貧困 支援モデルの開発

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景としては、次の二つがあげられる。

第一に、日本においても韓国においても、貧困層の子どもの中で最も多いのはひとり親家庭の子どもであり、その多くが両親の離婚とそれに伴う両親間の葛藤や転校、転居などの大きな環境の変化を経験している(77%以上)といった「日韓の離婚経験児が晒される劣悪な状況」である。

第二に、離婚経験児の心理状態に影響する「貧困」という要因を経済的側面に限らず、社会・文化的側面からも捉えることの重要性である。

以上のことから、劣悪な状況に晒されている日韓の離婚経験児にとって「社会・文化的側面」から「貧困」を捉え直し、それに対して支援を実施することは重要な課題と言える。ところが、離婚経験児における社会・文化的側面からの貧困の捉え直しは「抽象的レベル」に留まっており、当然ながら「社会・文化的貧困」の測定道具の開発はもちろんのこと、「社会・文化的貧困の発生メカニズム」への検討は行われていなかった。

2. 研究の目的

そのために、本研究では、生活主体としての離婚経験児に焦点をあて、日韓の離婚経験児の社会・文化的貧困を断ち切る支援モデルの構築に資することを狙いとし、「社会的・文化的貧困」の測定ができる尺度を開発したうえで、それによる影響を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

離婚経験児だけの調査は現実的にできないため、ひとり親家庭の子ども、もしくはひとり親家庭で育った成人を対象として調査を実施した。また、比較群として、二人親家庭で育った成人に対する調査も行った。

具体的には、ひとり親家庭の子どもへの調査は、韓国 A 市にあるひとり親家族支援センターの協力を得て実施した。75 名からのデータを得ることができた。

ひとり親家庭で育った成人と二人親家庭で育った成人への調査は、日本のアンケート調査会社に依頼して実施した。それぞれ 200 名、300 名からのデータを得ることができた。

(2) 調査内容

調査内容は性別や年齢、家族形態などの基本属性と「子ども期の経済的ストレス測定尺度(11 項目 3 因子二次因子モデル)」「社会的効力感測定尺度(8 項目 4 因子二次因子モデル)」「家族健康性測定尺度(11 項目 3 因子二次因子モデル)」「親子コミュニケーション測定尺度(13 項目 3 因子二次因子モデル)」で構成した。

(3) 解析方法

SPSS29.0 を用いて記述統計を行い、三つのグループ(離婚経験児、離婚経験児以外のひとり親家庭の子ども(育った子どもを含む)、二人親家庭の子ども)の回答分布を比較した。そのあと、グループ別における測定尺度間の相関係数を算出した。

4. 研究成果

(1) 基本属性

すべてのケースについてである。性別は、554 名のうち、男は 181 名(32.7%)、女は 371 名(67.0%)、その他は 2 名(0.4%)であった。平均年齢は 29.39 歳であった(標準偏差: 10.17、範囲: 8~49)。家族形態は、554 名のうち、220 名(39.7%)は離婚家庭、82 名(14.8%)は離婚家庭以外のひとり親家庭、252 名(45.5%)が二人親家庭であった。

三つのグループ別についてである。まず、離婚経験児のうち、男は 81 名(36.8%)、女は 138 名(63.2%)であった。平均年齢は 29.12 歳であった(標準偏差: 12.96、範囲: 8~49)。次いで、離婚経験児以外のひとり親家庭の子どものうち、男は 37 名(45.1%)、女は 45 名(54.9%)であった。平均年齢は 40.83 歳であった(標準偏差: 7.61、範囲: 22~49)。最後に、二人親家庭の子どものうち、男は 63 名(25.0%)、女は 187 名(74.2%)であった。平均年齢は 25.90 歳であった(標準偏差: 2.76、範囲: 18~29)。

(2) グループ別における子ども期の経済的ストレス測定尺度の回答分布

子ども期の経済的ストレス認知測定尺度の回答分布を表 1 に示した。離婚経験児の「子ども期の経済的ストレス認知」の平均値(グループ)は、2.58~2.98 であった。この結果は、離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(グループ)と二人親家庭で育った成人(グループ)に

比べて高い結果であった。

最も高い項目は、「xa4 友達とご飯を食べる時。お金の心配で食べたいメニューを諦めたことがある(2.98)」であった。最も低い項目は、「xa5 塾に通いたかったが、お金の心配で一緒に住んでいるお母さん、またはお父さんに言うことすらできなかったことがある(2.58)」
「xa11 お金の心配で、希望していた進学、または進路を諦めたことがある(2.58)」であった。

(3) グループ別における社会的効力感測定尺度の回答分布

社会的効力感測定尺度の回答分布を表2に示した。離婚経験児の「社会的効力感」の平均値(グループ)は、2.90~3.13であった。この結果は、離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(グループ)と二人親家庭で育った成人(グループ)に比べて高い結果であった(項目xb8は、逆転項目であるため、平均値が低いほど、社会的効力感が高いことを意味する)。最も高い項目は、「xb7 私は、自分なりのコミュニケーションスキルで、他の人に助けを求めることができる(3.13)」であった。最も低い項目は、「xb2 私は、誰でも気楽に会話を続けることができる(2.90)」であった。

(4) グループ別における家族健康性測定尺度の回答分布

家族健康性測定尺度の回答分布を表3に示した。離婚経験児の「家族健康性」の平均値(グループ)は、2.77~3.41であった。この結果は、離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(グループ)に比べて高い結果であった。一方で、二人親家庭で育った成人(グループ)に比べて低い結果であった(項目xc6のみ、離婚経験児の方が高い)。

最も高い項目は、「xc6 うちの家族は、家族構成員とし

[表1] 子ども期の経済的ストレス認知測定尺度の回答分布

質問項目	回答カテゴリ	その時、イライラしたり、怒ったり、もどかしさを感じたか。					平均値	標準偏差
		全くそう思わない	そう思わない	どちらとも言えない	そう思う	とてもそう思う		
		グループ	グループ	グループ	グループ	グループ		
xa1 友達と一緒に遊ぼうと言ってきたが、お金の心配で断ったことがある。	グループ	41	42	48	62	27	2.96	1.31
	グループ	23	26	15	11	7	2.43	1.27
	グループ	86	73	60	26	7	2.19	1.10
xa2 友達と一緒に遊びたかったが、お金の心配で遊びたいと言えなかったことがある。	グループ	44	38	51	61	26	2.94	1.31
	グループ	25	25	16	10	6	2.35	1.24
	グループ	84	80	58	22	8	2.17	1.08
xa3 友達とご飯を食べるとき、お金の心配で友達を食べようとしたメニューを安いものに変えたことがある。	グループ	46	34	61	46	33	2.94	1.34
	グループ	26	23	17	8	8	2.38	1.29
	グループ	89	63	69	23	8	2.20	1.12
xa4 友達とご飯を食べるとき、お金の心配で食べたいメニューを諦めたことがある。	グループ	50	29	48	61	32	2.98	1.38
	グループ	23	20	21	10	8	2.51	1.29
	グループ	83	63	65	33	8	2.29	1.15
xa5 塾に通いたかったが、お金の心配で一緒に住んでいるお母さん、またはお父さんに言うことすらできなかったことがある。	グループ	64	46	48	42	20	2.58	1.33
	グループ	34	20	20	5	3	2.06	1.11
	グループ	118	58	67	6	3	1.88	0.96
xa6 親と旅行に行きたかったが、お金の心配で一緒に住んでいるお母さん、またはお父さんに言うことすらできなかったことがある。	グループ	59	41	63	31	26	2.65	1.33
	グループ	32	19	20	8	3	2.16	1.16
	グループ	102	66	59	18	7	2.06	1.08
xa7 親と外食をしたかったが、お金の心配で一緒に住んでいるお母さん、またはお父さんに言うことすらできなかったことがある。	グループ	57	38	73	35	17	2.62	1.24
	グループ	33	23	16	3	7	2.12	1.23
	グループ	111	62	63	10	6	1.96	1.03
xa8 お小遣いを増やしてほしいと言いたかったが、お金の心配で一緒に住んでいるお母さん、またはお父さんに言うことすらできなかったことがある。	グループ	52	36	56	42	34	2.86	1.38
	グループ	31	24	13	6	8	2.22	1.30
	グループ	88	66	77	15	6	2.15	1.04
xa9 お小遣いをどう使うか計画を立てようと思ったが、金額が少なくて計画の作成をやめたことがある。	グループ	52	41	62	41	24	2.75	1.30
	グループ	28	24	17	5	8	2.28	1.27
	グループ	100	65	66	15	6	2.06	1.05
xa10 お金の心配で、アルバイトをしたことがある。	グループ	54	37	41	45	43	2.94	1.46
	グループ	26	18	12	11	15	2.65	1.50
	グループ	109	57	54	20	12	2.08	1.18
xa11 お金の心配で、希望していた進学、または進路を諦めたことがある。 例：私立中・高等学校 → 公立中・高等学校 私立大学 国公立高校など	グループ	64	43	60	28	25	2.58	1.33
	グループ	30	23	12	7	10	2.32	1.37
	グループ	120	53	52	21	6	1.97	1.11

注1: グループ : 離婚経験児(220名)、グループ : 離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(82名)、グループ : 二人親家庭で育った成人(252名)

[表2] 社会的効力感測定尺度の回答分布

質問項目	回答カテゴリ	その時、イライラしたり、怒ったり、もどかしさを感じたか。					平均値	標準偏差
		全くそう思わない	そう思わない	どちらとも言えない	そう思う	とてもそう思う		
		グループ	グループ	グループ	グループ	グループ		
xb1 私は、なかなか親しくなれなそうなる人でも、親しくなりたいと思えば、自分から近づけることができる。	グループ	34	38	63	55	30	3.04	1.26
	グループ	22	21	22	17	0	2.41	1.10
	グループ	37	59	84	59	13	2.81	1.11
xb2 私は、誰でも気楽に会話を続けることができる。	グループ	37	45	62	54	22	2.90	1.23
	グループ	19	19	28	15	1	2.51	1.08
	グループ	45	59	91	44	13	2.69	1.11
xb3 私は、初対面の人の前でも自信を持って自分の意見を言える。	グループ	34	47	62	56	21	2.92	1.21
	グループ	20	15	31	13	3	2.56	1.13
	グループ	46	69	86	37	14	2.62	1.11
xb4 私は、自分なりのコミュニケーションスキルで、様々な人の前で自分の考えを正確に伝えることができる。	グループ	38	38	71	48	25	2.93	1.24
	グループ	16	13	32	18	3	2.74	1.12
	グループ	36	56	101	46	13	2.78	1.07
xb5 私は、私のことを気遣わずに行動する人に、丁寧な言葉で気遣ってほしいと伝えることができる。	グループ	26	42	79	45	28	3.03	1.18
	グループ	18	11	36	14	3	2.67	1.11
	グループ	39	60	95	42	16	2.75	1.10
xb6 私は、会議・会合・集会などで人々が不当な決定を下したとき、自分の考えを堂々と述べることができる。	グループ	25	48	78	48	21	2.96	1.13
	グループ	17	14	35	13	3	2.65	1.09
	グループ	50	59	90	40	13	2.63	1.12
xb7 私は、自分なりのコミュニケーションスキルで、他の人に助けを求めることができる。	グループ	22	34	77	67	20	3.13	1.10
	グループ	17	13	30	19	3	2.73	1.14
	グループ	32	55	97	56	12	2.85	1.06
xb8 私は、助けが必要なとき、他の人に助けを求めるのは難しい。*	グループ	24	38	88	44	26	3.05	1.13
	グループ	4	21	29	12	16	3.18	1.17
	グループ	14	47	108	60	23	3.12	1.00

注1: グループ : 離婚経験児(220名)、グループ : 離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(82名)、グループ : 二人親家庭で育った成人(252名)
注2: *は、逆転項目

での所属感がある(3.41)」であった。最も低い項目は、「xb9 うちの家族は、多様なイシューについてディスカッションするのを大事にする(2.77)」であった。

(5)グループ別における親子コミュニケーション測定尺度の回答分布

親子コミュニケーション測定尺度の回答分布を表4に示した。離婚経験児の「親子コミュニケーション」の平均値(グループ)は、通常項目(xd1~xd5)は2.85~3.28であった。この結果は、離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(グループ)に比べて高い結果であった。一方で、二人親家庭で育った成人(グループ)に比べて低い結果であった。平均値が低いほど、肯定的なコミュニケーションを意味する逆転項目(xd6~xd13)は3.20~2.34であった。この結果は、離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(グループ)に比べて低い結果であった。一方で、二人親家庭で育った成人(グループ)に比べて、一部の項目(xd6・xd8・xd10)は高く、一部の項目(xd7・xd9・xd11~xd13)は低い結果であった。

通常項目において最も高い項目は、「xd5 親は、私が何かを聞いたら、率直に答えてくれる(3.28)」であった。また、最も低い項目は、「xd4 私は、悩み事があつたら、迷わず親に相談する(2.85)」であった。逆転項目において最も低い項目は、「xd9 親は、私のことをバカにしながら叱る*(2.34)」であった。また、最も高い項目は、「xd10 私は、時々親に自分の望みが言いつらい*(3.20)」であった。

【表3】 家族健康性測定尺度の回答分布

質問項目	グループ	回答カテゴリ					平均値	標準偏差
		全く そう思わない	そう思わない	どちらとも 言えない	そう思う	とても そう思う		
xc1 うちの家族は、自分の意見が言える機会を与える	グループ	24	22	63	73	38	3.36	1.20
	グループ	18	15	15	31	3	2.83	1.26
	グループ	14	28	72	107	31	3.45	1.03
xc2 うちの家族は、困りごとを一緒に解決する	グループ	28	30	69	57	36	3.20	1.24
	グループ	15	20	21	21	5	2.77	1.20
xc3 うちの家族は、お互いに感謝の気持ちや好きな感情を表現する	グループ	15	32	73	104	31	3.39	1.04
	グループ	24	32	62	61	41	3.29	1.24
	グループ	14	14	28	22	4	2.85	1.15
xc4 うちの家族は、お互いに話を傾ける	グループ	19	35	81	88	29	3.29	1.08
	グループ	25	30	65	65	35	3.25	1.21
	グループ	13	25	14	24	6	2.82	1.23
xc5 うちの家族は、お互いに信頼する	グループ	14	26	81	98	33	3.44	1.03
	グループ	21	23	58	65	53	3.48	1.23
	グループ	15	15	24	20	8	2.89	1.25
xc6 うちの家族は、家族構成員としての所属感がある	グループ	15	25	70	104	38	3.50	1.05
	グループ	23	21	71	52	53	3.41	1.24
	グループ	16	16	23	24	3	2.78	1.18
xc7 うちの家族は、お互いに腹を割って話す	グループ	17	23	82	106	24	3.38	1.01
	グループ	29	31	67	56	37	3.19	1.25
	グループ	25	16	18	20	3	2.51	1.26
xc8 うちの家族は、一緒にする活動(外食、余暇、趣味生活など)を楽しむ	グループ	21	44	78	83	26	3.19	1.10
	グループ	27	28	66	59	40	3.26	1.25
	グループ	13	16	20	27	6	2.86	1.21
xc9 うちの家族は、多様なイシューについてディスカッションするのを大事にする	グループ	13	30	58	98	53	3.59	1.10
	グループ	35	51	80	38	16	2.77	1.13
	グループ	25	18	26	11	2	2.35	1.13
xc10 うちの家族は、一緒にする時間を重要視する	グループ	30	45	100	61	16	2.95	1.07
	グループ	28	28	73	58	33	3.18	1.21
	グループ	19	15	27	19	2	2.63	1.15
xc11 うちの家族は、一緒に対話するのを楽しむ	グループ	20	29	86	84	33	3.32	1.09
	グループ	26	23	75	58	38	3.27	1.21
	グループ	18	15	23	23	3	2.73	1.20
	グループ	16	27	81	87	41	3.44	1.08

注1: グループ : 離婚経験児(220名)、グループ : 離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(82名)、グループ : 二人親家庭で育った成人(252名)

【表4】 親子コミュニケーション測定尺度の回答分布

質問項目	グループ	回答カテゴリ					平均値	標準偏差
		全く そう思わない	そう思わない	どちらとも 言えない	そう思う	とても そう思う		
xd1 私は、迷わず親に自分の思いを言う	グループ	28	46	65	52	29	3.04	1.22
	グループ	22	17	17	25	1	2.59	1.22
	グループ	20	38	82	88	24	3.23	1.07
xd2 親は、私の話をよく聞いてくれる	グループ	31	31	59	56	43	3.22	1.30
	グループ	17	19	19	24	3	2.72	1.20
	グループ	10	31	73	97	41	3.51	1.03
xd3 親は、今の私の気持ちがよく分かる	グループ	32	31	79	46	32	3.07	1.23
	グループ	23	11	27	18	3	2.60	1.22
	グループ	16	39	97	73	27	3.22	1.04
xd4 私は、悩み事があつたら、迷わず親に相談する	グループ	41	40	74	42	23	2.85	1.23
	グループ	29	13	26	13	1	2.32	1.15
	グループ	18	40	93	71	30	3.22	1.08
xd5 親は、私が何かを聞いたら、率直に答えてくれる	グループ	31	24	60	62	43	3.28	1.29
	グループ	17	14	25	23	3	2.77	1.18
	グループ	12	26	82	98	34	3.46	1.01
xd6 私は、時々親の話が信じられない*	グループ	32	42	78	44	24	2.94	1.19
	グループ	4	18	27	22	11	3.22	1.09
	グループ	29	56	96	58	13	2.88	1.05
xd7 親は、私が分かっていることを、あえて言って気分を悪くする*	グループ	46	50	64	46	14	2.69	1.20
	グループ	8	10	35	21	8	3.13	1.07
	グループ	34	46	103	58	11	2.87	1.06
xd8 親は、私に小言が多い*	グループ	38	47	64	38	33	2.91	1.30
	グループ	14	16	22	19	11	2.96	1.29
	グループ	33	54	90	57	18	2.89	1.12
xd9 親は、私のことをバカにしながら叱る*	グループ	73	48	65	20	14	2.34	1.21
	グループ	25	21	17	7	12	2.51	1.39
	グループ	76	75	72	22	7	2.24	1.06
xd10 私は、時々親に自分の望みが言いつらい*	グループ	25	40	60	55	40	3.20	1.26
	グループ	5	15	22	17	23	3.46	1.25
	グループ	22	32	104	75	19	3.15	1.03
xd11 私は、親と話し合うことに迷う*	グループ	45	48	62	40	25	2.78	1.28
	グループ	8	11	29	19	15	3.27	1.20
	グループ	25	40	113	53	21	3.02	1.05
xd12 私は、親と相談したくない悩みがある*	グループ	32	37	62	55	34	3.10	1.27
	グループ	6	8	31	18	19	3.44	1.17
	グループ	17	40	89	83	23	3.22	1.04
xd13 私は、親に本音が言いつらい*	グループ	35	48	62	44	31	2.95	1.27
	グループ	7	15	20	18	22	3.40	1.29
	グループ	22	53	96	63	18	3.01	1.05

注1: グループ : 離婚経験児(220名)、グループ : 離婚家庭以外のひとり親家庭で育った成人(82名)、グループ : 二人親家庭で育った成人(252名)
注2: *は、逆転項目

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 姜民護・張希貞	4. 巻 第36号
2. 論文標題 韓国におけるひとり親家族の親子関係改善プログラム「ミサリ」 - ひとり親家族会ハンガジの実践 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社社会福祉学	6. 最初と最後の頁 62～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------